江原由美子・金井淑子編

フェミニズム

「冠付き」諸潮流を解説

12のテーマを14人の著者が詳細に

清水久美

46判・372頁・2600円
新曜社
4-7885-0611-4

久々に出たフェミニズムの論集。主要な「フェミニズム」を取り上げ、系統的に解説した良書である。「正当な思想」であるリベラリズムの「諸原理と接合された」ものとして始まったフェミニズムが、実現困難や限界に突き当たり、「冠付き」と称される「フェミニズムの諸潮流」に分岐していった過程もよく分かる。

江原由美子が担当する総論以下、本書に取り上げられているテーマは12にわたる：ラディカル・フェミニズム、リベラル・フェミニズム、レズビアン・フェミニズム、レイシズム、フェミニズム文学批評、精神分析、ポストモダン・フェミニズム、日本のフェミニズム論争史、宗教、身体／生体、エコロジカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズム、ポスト・マルクス主義フェミニズム。一見、百花繚乱の体を成しており、各テーマを担当した総勢14人の著者たちは、各々豊富な知識をもとに詳細にわたる刺激的な解説をしている。それでも、重要なテーマが抜け落ちているという不満が残る。

まず、レイシズムなど、「他の差別問題」に多少触れられてはいるものの、差別自体についての論及が欠けている。相対化・脱構築を語るなら、「性差別」を自明の共通事項と見なすのではなく、「差別というもの」とじかに向き合って吟味している論考を交えてほしかった。重層的差別やマイノリティを考える上で重要なブラック・フェミニズムについても、ほとんど取り上げられていない。また、エイジズムや障害者差別なども忘れられている。

同じく、心理学やエスノメソドロジーといったアイデンティティ論・人間関係論的なアプローチが見落とされている。フェミニズム全体を見回しても、これは決して小さな流れではないはずだ。事実、日本でも、フェミニスト・セラピーを基本とした研究や実践が進められている。

セクシュアリティについても単独で取り上げてほしかった。レズビニアズムとして特化された性以外の領域については、研究も理論化も遅れているためだろうが、ヘテロセクシャリティを暗黙の了解とし、「性的な現実」は個別のものだと沈黙を決め込むのでは、「個人的なことは政治的」の精神にもそぐわない。また、レイプや家庭内暴力、セクシュアル・ハラスメントなどに見られる現実的な「性にまつわる諸問題」とその仕組みも、取り上げるべき重要なテーマだろう。

他にも、男性学、メンズ・リブの流れも、人によっては「フェミニズム」の一潮流あるいは大いに影響を受けた分派）と見なすかもしれない。

このように見ていくと、ポストモダン・フェミニズムを担当した金井淑子が「フェミニズムの主体内部にかかわる問題」と述べているように、フェミニズム自体の中に無数の「差異」「亀裂」があることを痛感させられる。フェミニズムにおいては、いくらでもテーマを上げ、新たなアプローチを提案することがまだまだ可能なのだ。逆に言えば、ここまで多様なフェミニズムを集めたからこそ、わたしの抱いたような不満も生まれてきたのだろう。

本書を読めば、自分の知っている「フェミニズム」が冠付きだと、はっとさせられる人も多いに違いない。フェミニズムを多少あるいはよく知っているつもりの人に、お勧めしたい一冊だ。

（しみず・くみ氏＝翻訳家）

★えはら・ゆみこ氏は東京都立大学助教授・理論社会学・女性学専攻。東大大学院博士課程中退。著書に「生活世界の社会学」「フェミニズムと権力作用」「装置としての性支配」など。一九五二（昭和27）年生。

★かない・よしこ氏は長岡短期大学教授・倫理学・女性学専攻。東京教育大大学院修士課程修了。著書に「転機に立つフェミニズム」「ポストモダン・フェミニズム」「女性学の挑戦」など。一九四四（昭和19）年生。